

2021. 4. 18. 主日礼拝説教  
聖書：ヨハネによる福音書 3章 16-21節  
『世を愛するということ』

▼韓国に「ネギを植えた人」という民話があります。次のようなお話です。

▼昔、その国は日照りのため飢饉になることがよくありました。そして、その国の人は腹ペコになると自分以外の人が牛に見えてきて、人が人を食べるという恐ろしいことをするのです。

▼ここに一人の若者がおりましたが、彼も飢えた時、弟を牛と間違えて食べてしまったのです。やがて自分が犯した罪に気づき、苦しんだ若者は、人が人を食べることのない村を探すために故郷を後にしました。苦しく、そして長い旅でした。どの村を訪ねても人々は飢えるたびに殺し合い、食い合いをしていました。それでも彼はあきらめなくて、理想の村を探し求めて旅を続けました。ある日彼は、飢えに苦しんでいても決して人を牛に間違えず、しかもみんなが助け合って仲良く暮らしている村に辿り着いたのです。どうしてこの村ではみんなが助け合って仲良く暮らしているのか尋ねる彼に村人は答えました。「昔この村の人々も殺し合い、食べ合っていた。けれどもネギを食べるようになってから、そんな恐ろしいことはなくなったのです。」

▼「自分が長い間探していたのはこれだ。これで故郷の村も地獄から救うことができる。」そう信じた彼は、ネギの種を貰って自分の村へとんで帰り、柔らかい土の上に種を蒔いたのです。でもその時、故郷の村は飢えていました。彼は友達に会いに行き、事の次第を話そうとしたのですが、逆に牛に間違えられて食べられてしまったのです。それから幾日かして、畑の片隅に青い草がはえました。村人は恐る恐るその草を食べました。それは不思議に良い香りがしました。そして、その時以来、村人たちはネギを食べるようになり、恐ろしい人間同士の食べ合いもすっかりなくなりました。この物語の最後はこう締めくくられています。「ネギを植えた人は、誰からも感謝されず、みんなにつかまり食べられてしまいました。しかし、この人の真心は生き残って、のちのちの世の人たちを幸せにしました。」

▼この話の最後の言葉は、今日与えられましたヨハネ福音書 3章 16 節の  
「神はそのひとり子を賜ったほどに、この世を愛して下さった。それは御子を  
信じる者がひとりも滅びないで、永遠の命を得るためである」と通底する結び  
なのではないでしょうか。それは十字架に架けられ殺されたキリスト・イエス  
の生き方そのものなのです。

▼「世」という原語は新約聖書に 185回用いられ、ヨハネ福音書には 78 回  
使われます。多くは神とイエスに対立と反抗を意味する概念や勢力なのです。  
敵対するものは排除する対象であるとする狭量で根強いナショナリズムを越え  
て、ヨハネは「世」こそが福音の対象であると告げます。それは対立や反抗が  
決して敵ではなく、そんな「世」のただ中であってこそ、わたしたちは生きて  
いるのだという事柄の確認と、そんな「世」のただ中だからこそ、わたしたち  
は自己逃避してはいけないという確認作業なのではないでしょうか。

▼人はともすれば世をはかなみ、この世を捨てて信仰になどという妄想と自己  
満足に満ちたごまかしの世界に踏み込みたがります。でもそれは、ヨハネら福  
音書記者たちの証言するイエスを信じない者と分割された（裁かれた）者  
の思い違いでしかないのです。なぜならば、イエスの歩みは十字架に架けられ  
るまで徹底して「世」を憎むどころか、放棄せず、愛し続けられたからなの  
です。